

竹崎季長が絵解きする 『蒙古襲来絵詞』 : 矢羽と風から

服部, 英雄
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1508413>

出版情報 : 歴史を歩く時代を歩く : 服部英雄退職記念誌 : とことん服部英雄, pp.16-46, 2015-03-31.
九州大学大学院比較社会文化研究院服部英雄研究室
バージョン :
権利関係 :



竹崎季長が絵解きする『蒙古襲来絵詞』——矢羽と風から——

Moko Shurai Ekotoba (Illustrated Account of the Mongol Invasion), Battle Record of TAKEZAKI Suenaga Discussion on feathering patterns and the wind

服部 英雄 (Hattori Hideo)

はじめに——迷子は帰そう

I 章 矢羽の記録（文永の役・鳥飼浜合戦）

1 三人の蒙古兵との苦闘

——二人を倒し、果敢な蒙古兵も倒す寸前だった！

2 ひとり、一人によって、矢羽は異なる

——生の松原石築地と三井資長の切斑

II 章 風を描く（弘安の役・博多湾合戦）

3 海上合戦・不利な低位置、逆風での苦闘！

4 海戦はいつか

5 画面の接合・詞書きの接合

——弘安四年六月八日・能古島沖合戦の復原

III 章 迷子（断簡）をもとに戻す

6 『蒙古襲来絵詞』接続の是正

むすびにかえて 日本文要旨 英文要旨 Abstract

はじめに——迷子は帰そう

Preface ; We put back the pictures whose positions were lost to the original place

『蒙古襲来絵詞』は世界の至宝である（三の丸尚蔵館所蔵、旧御物＝皇室財産）。一二七四年（日本文永十一年）および一二八一年（日本弘安四年）の二度、元（＝皇帝フビライ）と、元に従属する高麗、その連合軍が、日本を攻撃した。異国人、まるでみたこともない兵器——それを駆使する。全く異なる作戦を展開する。難敵そのもの、異国人との戦いがつづく。蒙古襲来は、鎌倉幕府御家人のだれにとつても、初めての経験だった。

とりわけて、命がけにて戦いぬいた武士がいた。ご存じの肥後国御家人、あの竹崎季長である。自分以外には、二度と経験はできないであろう、劇的な戦いぶり。ぜったいにそれを記録する。子孫にも、他人にも語って、また伝えたい。その気持ち、竹崎季長には人並み外れてあった。合戦が終わってから一〇年、異例の戦記・戦争体験記を作成した。なぜ異例なのか。

第一に、その記録・戦記は、絵詞（絵巻物）であった。巨額を投じなければ、完成しえなかった。竹崎季長の場合、身分不相応ではないかと思うほどである。較べてみよう。たとえば『後三年合戦絵巻』は後白河院の「院宣」によって作成された。現存しないが「将門合戦絵」は源実朝の命令で作成された。つまり多くの合戦絵巻は、国家権力相当によって作成された。^{*1}そのことと、比較すればよく

わかる。ふつうなら最高権力者たる天皇家、鎌倉幕府將軍、あるいは大社寺、そのクラスでなければ作成できない絵巻物を、肥後の一御家人が作成させたのだから。

*1『吉記』承安四年・一一七四・三月十七日条に、「件絵、義家朝臣為陸奥守之時、与彼国住人武衡家衡等合戦絵巻也、(略) 静賢法印、先年奉院宣始令画進也、』『康富記』文安元年・一四四四・閏六月二十三日条「此絵四卷在之、承安元年月日、依院宣、静賢法印其時上座にて承仰、令絵師明実図也云々、其絵濫觴者」(以下略、静賢は信西の子)、『吾妻鏡』元久元年・一二〇四・十一月二十六日条、「將軍家日来仰画工、於京都被図將門合戦絵、今日到来。」

第二にはその実録性、リアル性である。多くの絵巻は、事件が過ぎて、年月も経過してから作成され、当事者は生存していないことが多かった。よって伝聞や記録によつて絵画が描かれる。しかし、この『蒙古襲来絵詞』は当事者である竹崎季長が絵師に説明し、さまざまに指摘もしている。詞書には、季長の口調がそのまま含まれている。通常、洗練された絵巻の詞書では使われないような言葉、たとえば「ひかけ(ひっかけ)」、「ころはた」のような独特な言葉がある。絵巻類はもちろん、古文書・古記録を含む他の史料での用例を、ほとんど見ない。語感からすれば、当時の肥後方言、季長の口調のままだったのかも知れない。

『蒙古襲来絵詞』、その詞書は体験したものにしかならない、微に入り、細を穿つたもので、その点だけでも貴重なうえに、言葉だけでは不足であつて、絵を画くことによつて、具体的に、可視的に示している。『蒙古襲来絵詞』が至宝たるゆえんである。ヨーロッパでもモンゴルによる制覇が展開される。その過程での戦争場面を画いた絵には、一二四一年のワールシュタットにおけるドイツ騎士団・ポーランド連合軍とモンゴル軍との戦いを画いた「聖ヘドビギス図絵伝」(一三三三、アメリカ・ゲティ博物館蔵)がある。マルコ・ポーロ『東方見聞録』挿絵もある(二〇二二、岩波書店一九九・二〇一頁、ISBN978-4-00-024815-0)。貴重な絵画であるが、伝説色・宗教色が濃厚で、写実性よりは空想、観念性が感じられる。比較すれば、『蒙古襲来絵詞』のリアル感は一目瞭然と思う(『蒙古襲来と博多』・北条時宗とその時代、

別冊図録、平成一三・福岡市博物館)。

図1 聖ヘドビギス図画伝・アメリカ・ゲティ美術館：上記図録より

わたしは歴史学研究に従事し、その立場から、蒙古襲来を研究してきた。その成果を『蒙古襲来』(山川出版社)として、二〇一四年一月に上梓した。作業に当たつて感じたことは、『蒙古襲来絵詞』の「史料としての無限性」である。読みこめば読みこむほど、季長の言葉、語ろうとしたことを、手に取るように読み解くことができる。終わることなく、次から次に季長が訴えかける。

季長の立場になつて読み直すことにより、理解も深まる。絵詞は寛政九年(一七九七)に、熊本(細川)藩・時習館の学者、高本紫溟らによつて修復された。そのおりに、配列が決定できなかったためであろうか、巻末にいくつかの料紙が残された。残された料紙は、絵が四場面、詞書が一枚である。いつのできごと、どこでできごとなのか、が決定できなかった。

しかし季長がなぜこの場面を描かせたのか、じっくり考えれば、本来の場所も明らかになる。断簡(断片)扱い、つまり迷子とされてしまったのは、中身を正しく読めず、理解できていなかったからだ。

正しく読めず、正しく配列できなかった背景に、弘安の役の経緯を誤っていたことがある。池内宏に代表される通説、すなわち鷹島にて蒙古軍が台風(神風)によつて全滅したとする説は、あまりに矛盾が多かった。ところがその矛盾に気づく研究者は百年近くの間、ひとりとして現れなかった。またもうひとつの要因に、研究者の傍観者的な態度があつた。客観視だけでは史実に入り込めない。いったんは主観的に、竹崎季長に同一化する努力を試みたい。

前者は前掲著書にて正したつもりである。一事例を挙げるならば、生の松原から出発した季長兵船は西の時(夕方四時前後)に戦場に着いている。生の松原から鷹島までは一〇〇キロ以上ある(*距離は沿岸流を求めて行った場合である。糸島半



▲ ▼ 図1 聖ヘドビギス図画伝アメリカ・ゲティ美術館



島北西端から呼子半島北端に直線航路を取れば、もっと短くなるといえるが、絵図の船は舷側も低く、ひらだ船（川船）に近い。仮に帆があつたにせよ、風向きや視界の有無があつて、よほどに好条件でなければ、直線航路はむずかしいと判断する。時速わずか四キロの櫓押し船で鷹島までの距離を漕げば、酉の刻までに着けるはずはない。到着可能な戦場は、一〇キロ弱先の志賀島沖である。石築地は博多湾岸にしかない。菊池一族を始め、肥後勢が生松原に陣取っていたのは、敵が博多湾内、志賀島にいたからである。弘安の役の基本図式は博多湾合戦、志賀島合戦であり、一部に志賀島への補給陣地、壱岐を攻撃する作戦があつた。

本稿では季長の主張に即して、『蒙古襲来絵詞』をあらためて読み直す。わたしたちは季長になってみる。季長なら、このように絵詞を説明する。季長はいくども、いくども、敵の攻撃を受け、落命の危機にさらされた。それでも侍として、武士と

して、どんな危険にも行動し続けた。勝ち戦も負け戦も、率直に絵・詞で示している。防禦と攻撃、危機と勝利。かならず組み合わせになっている。強敵であり、完全な勝利、安全な戦いはなかった。竹崎季長は何度も落命の危険を経験した。たとえ危険であつても精一杯の戦いもした。描写にあたつては絵師への、くり返される具体的な修正指示があつた。武勲であるから、当然に誇張やフィクションもあつたであろう。

絵詞を正しく読み解くことによつて、竹崎季長の声が聞こえてくる。完成した絵詞を披露するにあたり、竹崎季長は見るものにとつて絵詞を説明したのだろうか。わたしは竹崎季長になりかわり、絵解きをする。

絵詞をただしく理解すれば、迷子の絵も、詞書も元に戻すことができる。『蒙古襲来絵詞』に、季長の主張が、いかに、具体的に織り込まれているのか。実録であるが故に、秀逸で異例で貴重である。そのことを再認識できるだろう。

＊本稿での『蒙古襲来絵詞』図版は『折本 日本古典絵巻館』（一九九六 ISBN:4889150994, IS1001）に依った。原所蔵は宮内庁三の丸尚蔵館

I章 矢羽の記録（文永の役・鳥飼浜合戦）

What do those feathers of arrows tell about? (The Battle of Bun-ei, at Torikaidoland)

1 三人の蒙古兵との苦闘——二人を倒し、果敢な蒙古兵も倒す寸前だった！

『蒙古襲来絵詞』を通じての基調たる、竹崎季長の、死を恐れぬ激闘の連続——その1、まずは最も著名である場面、教科書にも多く取り上げられてきた、文永の役における竹崎季長と蒙古兵の対戦をみたい。『蒙古襲来絵詞』といえば、大半の読者がこのシーンを思い起こされよう。名場面である（図2）。

●異時同図法

この場面は異時同図法が用いられている。同じ画面に、異なる時間帯を描き込む手法であり、絵巻にはよく用いられる。『蒙古襲来絵詞』のこの場面では、時間は左から右に進む。この画面は二三紙・二四紙にまたがるが、二四紙の画像はさらにもう少し左に続くようなので、本来はさらに長かった。壮大な一大スペクトラルである。

●逃げる蒙古兵

左端には、逃げる蒙古兵の一群いる（むろん左に失われた部分があるから、じつさいはもっと多くの兵が逃げていただろう）。矢筒には何本もの矢が描かれているが、肝腎の弓を持って逃げる兵がいない。戦意を喪失して、弓まで捨てていた。その右側



（図2）前二三、二四紙・鳥飼浜 季長と三人の蒙古兵、逃げる蒙古兵、三の丸尚蔵館所蔵、図版は『折本 日本古典絵巻館』から

には網代の戸板を背負って隠れる二名の蒙古兵がいる。戸板は編まれた竹の弾力で、矢をはじき返すことができた。しかし、限界があつて、軽量であるが故に、防御能力が低かった（＊2）。兵たちは、ともに手に棒のようなものをもっているけれど、棒がどのような武器なのか、詳細はわからない。倒れる一人は、右手でかろうじて戸板を支え、左手は地面すれすれで、もはや前には進めないかのような。流血も著しい。その手前、右にも逃げる兵がいて、マントには矢が中つている。（図3）（図4）

＊2 二七紙・祖原山ないし別府にて待機する蒙古軍団にも、この戸板が林立して画かれている。

（図3）前二四紙・戸板を持って禦ぐ蒙古兵
（図4）前二七紙・祖原山

●左眼に的中した矢（図5）

この一団の前に唯一射撃をする二人がいる。ところが手前の緑色の綿甲冑（＊3ヨロイマント）の兵Aの顔に、矢が命中している。なんと左眼に中つたようである（図5）。赤いマントと色が重なってわかりにくいものの、あきらかにマントの外側にも夥しく真っ赤な血が流れ、マントの裾よりも下、ほとんど地面にまで達するところまで、血しぶ



(図3) 異時同図法、その場面1 戸板を持って逃げる蒙古兵、反撃する兵の左眼に矢 (図5)



(図4) 祖原山

きが画かれているようにみえる。点々は滴る血であろうか。たぶん男Aは立つてはいられず、自ら目に刺さった矢を抜こうとし、力尽きるのだらう。Aが放とうとした自らの弓に、矢は画かれている。矢はまだ残っており、射放つ前に倒された。

全身を綿甲冑（ヨロイマント）で覆う。しかし顔面にまで、ヨロイはまといえない。とりわけ眼が最大の弱点だった。絶好の標的ではあるが、ふうう敵も逃げるはずだから、的中は至難である*4。後ろ左側の兵は引きつたような、恐怖におびえきつた表情で、何かをしっかりと持つ（詳細不明、武器ではないかもしれない）。

*3 「綿甲冑」の言葉は桜井清香『元寇と竹崎季長絵詞』一九三頁による。皮ヨロイとする人もいる。

*4 後三年役での鎌倉権五郎景正も目に刺さったことで有名。『後三年役絵巻』にその場面が描かれているが、ほかにも多数の武者が顔に矢を当てられている。『法然上人絵』



(図6-2)



(図6-1)



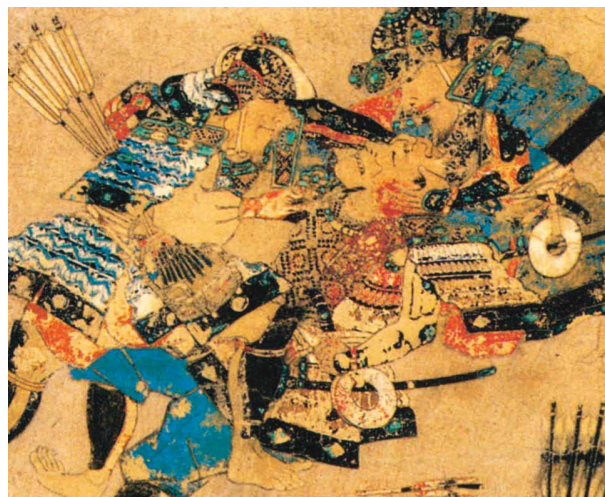
(図5) 眼に的中する矢、本黒の矢羽



(図6) 顔・眼への的中 (後三年合戦絵詞)



(図6-3)



(図6-4)

(図6) 顔・首が最大の弱点

伝『漆間館夜襲』では、頭に矢が刺さる武士が描かれている。顔の一部を覆う面具を装着することはできるが、この絵詞では蒙古兵も日本兵も着用していない。
(図6-1, 6-2) 『後三年合戦絵詞』より
(図6-3, 6-4) 『後三年合戦絵詞』より

● 的中した矢は本黒

蒙古兵の左眼に命中したこの矢、その矢羽は「本黒」である。そのことを記憶いだきた。

矢羽は矢がまっすぐに飛ぶ上で、必要不可欠な矢の要素で、三枚の羽の揚力を利用し、回転させる。中つたときに決るように刺し、殺傷力を高める。雉、山鳥、鷲、大鷹などの羽を用いる。鷹は武士の館に飼育されていた。鷹狩のため、『一遍上人絵伝』など、武士館の光景には鷹の姿が描かれている。おそらく鷹の尾羽が多用された。模様にはさまざまものがあつて、白羽、本黒、妻黒、中黒、本白、中白、妻白、黒羽などと呼ばれている。交互に混じるのが切斑(きりふ、植物の葉によく見られる)で、切斑にも矢形尾(矢のような山形の尾羽模様)、町形尾(四角な形の尾羽模様)があつた*5。左眼のこの矢の場合は、先(鏃側)が黒く、次に白と黒がかすり・まだらとなつて、矢筈側が白になる。つまり本が黒いので、「本黒」である。

*5 続群書類従・鷹部『鷹経本疑論』六〇九頁、『責鷹似鳩拙抄』七六三頁、

● 矢羽模様は手柄の証拠

武士はだれが射た矢なのか分かるように、各自が異なる紋様の矢羽を持って、参戦した。たとえば敵の大將を射た矢はだれが射たものなのか、矢羽の模様によって一目でわかるようにしていた。射手にしてみれば当然で、手柄を人に奪われてはたまらない。射中したのは、自分であることを、明確に示す必要があつた。強弓の持ち主は、矢に名前も書き入れたとされる*6。

* 6 『平家物語』壇ノ浦合戦に、「和田小太郎平義盛」「伊予国住人仁井紀四郎親清」と漆書きのある矢が、矢いくさに用いられた、とある。

●季長・本黒の矢こそが左目的的

そこで季長の箆（へびら）戦場用の矢筒（*7）に残された矢を見る。三本の矢が画かれている。箆には通常、二四本の矢を容れた（*8）。よってこのときまでに、季長は少なくとも二一本の矢を射終えていた。

季長の矢は明確に模様が描かれている。矢筈側が白、鏃側が黒、その間がまだらになっている。つまり「本黒」である。すなわち先に見た蒙古兵の顔に命中した矢こそが、季長が射た矢だったのだ。この段階までは季長に危機はなかった。敵は矢を射ようとして、発射寸前に季長に倒されたからだ（*9）。

「本黒」はほかにもある。奥側、倒れた緑色の兵の周囲を飛ぶ矢、五本のうち三本は「本黒」である。直接命中した矢は画かれていないが、この兵を倒す以前にサポートした功労者もまた、竹崎季長である。そう主張していると考える。

最初は日本側に追われて逃げる蒙古兵の場面だった。一部は反撃したが、季長の強弓に倒された。この局面までは、季長が圧倒的に優勢だった。その時間帯をまず画いたのである。

* 7 矢入れ、やつば。胡録（ころく・やなくい）は公家用とされる。箆・胡録は右腰に、韆は背に負う（『日本武器具』）。

* 8 『平家物語』橋合戦に「二十四刺したる矢」とある。最大で三〇本が入るともいう。

* 9 この蒙古兵の前、右側に逃げてくる蒙古兵が二人画かれている。本来なら射撃のジャマになりそうだが、そうならないのは、読む側がこの時間差を理解していたためである。

●優勢から劣勢へ

ところが一転して、季長危機の場面になる。突如現れた三人の果敢なる蒙古兵。左の一群は視野から去り、画面は三人と季長のみで構成される。馬上の竹崎季長は眼前の三人との対戦に必死で、すでに馬の腹からは血が流れ、季長自身、兜に赤

い矢、防具のない膝に矢が的中している。膝を射貫いた矢は赤で縁取りがあり、馬の腹に命中した矢の羽根は赤い色彩が画かれている。兜の矢は全部赤く画かれている。ただし、このような赤い矢を矢筒（＝日本のえびらとちがつて細長い）に入れている蒙古兵は画かれていない。

馬は瀕死、季長もまさに殺害される寸前であった。蒙古兵（その一、B）は、熊皮の矢筒（矢入れ）を持つ。弓袋（弓入れ）も腰にしている。射終わっている人物は、この兵Bのみだ。

●善戦も虚し

Bの射る矢の模様は中黒のようである。季長に命中した赤い矢、また赤の縁取りの矢をいた蒙古兵は描かれていない。季長も絵師も敵側にはこだわらなかつたらしい。どこから飛んできた矢に中つたのだ。

Bの足下に左に飛ぶ矢があり、的中ではなくて、かすかに逸れた。先が白く本が黒い。本黒だから季長の矢であろう。

三人のうち青の戎衣（マント・鎧）を着て、槍を持つ兵Cをみると、頭の横、至近を矢が通過する。これも「本黒」の矢だ。この場面、季長は一方的に追い込まれたのではなく、対等に激しく戦っていた。この絵には、わずかな時間差を読者が追うことによつて、季長の奮闘を追体験できるように、いくつもの仕掛けが用意されていた。

—— わしの矢がまず、みごとに敵の眼に命中した、もう一人も倒しかけたぞ。そしたらものすごい連中、三人が突然出てきた。わしが狙った矢はちよつとだけ、外れてしまった。惜しかった。二人は倒せるところだったのに、自分がやられてしまった。

季長はこの絵によつて、子供や孫や、たずねてくる人々に、自らの戦いを具体的に語った。自慢もした。奮戦記の絵解きを、自ら語って見せた。

●制作過程での時間差

時間差は完成画面だけでなく、制作過程にもあった。この場面は下絵の段階で、左右に長い構図になっていた。絵は工房のスタッフ全体で描画するから、蒙古兵多数はスタッフ＝弟子が描いた（背景の色塗り、単調な建物なども弟子が画く）。三人の場面は、二枚の紙の貼り合わせた部分に描かれている。つまり左が描かれたあと、貼り合わせられて右が描かれたようだ。最も重要な場面であるから、三人と季長は最も優れた技量を持つ師匠、すなわち絵師棟梁が描いた。絵のタッチが異なり、多くの蒙古兵のうち、三人のみに威圧感があるのは、描き手が異なるからである。

跳ねる馬に乗りつづける季長、その不自然な体勢は、後の時間帯、(2)の果敢な三人に対応する姿勢であることは明白で、危機に面した瀕死の季長として画かれた。左の一団は敗れて逃げる集団、敗走兵だったから、弱い姿に描かれる。右手の三人は、直後に登場して、季長に負傷させるほど、武力に秀でた最強勇士だったから、左とはまるで異なる勇猛な姿にて描かれる。当然であろう。ヨロイマントやカブトも左と右で、あえて差を出し、異時同図法を用いつつ、両者渾然として一体感を持たせ、季長の力戦を描き上げた。すばらしい描写力である。

前の時間帯、左の蒙古兵をさんざん追い詰めた時は、季長は馬上からでも動きの少ない、安定に近い状態だった。危機状態で季長が射た矢が、左眼に命中したと考えることには無理がある。馬上静止の絵は省略された。描かれたのは、馬上にての危機である。

よってこの絵の場面・部分の時間差は、(1) 左に逃げる多勢、そのなかで一矢を報いようとしながら、季長の矢に目を射貫かれた一名と、となりのもうひとりのみが抵抗を見せた時間帯。そして反転して(2) 新たに伏兵のように現れた猛々しく強い三人の蒙古兵、との時間帯となる。

2 ひとり一人によってちがう矢羽 —— 生の松原石築地と三井資長の切斑



(図7-1) ひとり一人異なる矢羽

切
斑

棲
黒切
斑

中
黒

本
黒

棲
黒



(図7-2) 異なる矢羽(一部拡大)

●生の松原石築地

さて以上では、侍は異なる模様の矢羽の矢を所持したことを前提にした。しかし上記の場面では、射手は季長一人しかいないので、十分な説明になっていない。よって他の二場面でも確認しておく。武士一人一人によって矢羽が異なることの確認は、この『蒙古襲来絵詞』ならどの場面でもよいのだけれど、生の松原の石築地にて築地上に待機する菊池一族と、その前を行進する竹崎季長一行を画く場面をみてみよう。左右三枚の料紙に亘る庄巻の場面であつて、上記、鳥飼浜と並ぶ『蒙古襲来絵詞』を代表する双壁で、おそらくは読者にもなじみのある光景である。

ここで季長は朱塗りの篋(矢竹)を箆に収納している。絵では縦四、横四で、一六本のようにみえるが、ただしくは六×四で、二四本の収納であろう。また矢羽は「中白」である。矢は合戦毎に新調する。むろん文永合戦でも矢は射尽くしていた。文永の役(本黒)と異なるのは当然である。矢師が一羽の鷹の尾羽・手羽から作成した、矢羽文様の揃った新しい二四本を持参する。

また閏七月五日志賀島海戦で、敵船に乗り込み、敵の首を取る季長の矢羽も同じく中白である。ただし篋は朱ではなく、黒く塗られているようだ。合戦の日が異なるのか、絵師の不備なのかはわからない。季長より後ろの四騎の矢羽は、本黒、中黒、本黒(ただし前々を行く武者の本黒とは模様が異なる)、以上三騎の篋は黒塗り、最後尾は白羽で篋は素地である。季長の一行は、ひとり一人の矢羽の模様が異なっていて、篋の色もちがっていた。

いっぽう石築地上の菊池一族は三五人が画かれていて、うち箆を負った姿のものは二三人である。菊池一族はみなその篋が黒く塗られている。これは一族の象徴として黒の矢を、統一して用いたものであろう。

矢羽は劣化の著しい八紙ではほとんど白にしか見えないが、六紙では中黒、本黒、本白、棲黒、切斑など多彩である。むろん個人個人では文様を統一している。

菊池一族は旗印に鷹の羽紋を用いて、惣領のみは並び鷹の羽(二つ鷹の羽)紋を

使用し、庶子は一つ鷹の羽紋の旗印だった。その鷹の羽紋は切斑であつた。実際の矢に切斑を用いた侍も多く、少なくともこの場面にて六人は、いるように見える。惣領の三郎武房は剥落があるが、やはり矢羽は切斑のように見える。

このように、武士はひとり一人、異なる矢羽の矢を簞に入れて、戦場に臨んだ。このことは前三紙、五紙、六紙、九紙、一三紙、一五紙、一七紙、後巻一一、一二紙、一五、一六紙、一九紙、二六紙、弓矢が画かれたすべての場面で確認できる。なかには白紙で巻いたかのように見えるところもあるが（後六、七紙、一九紙）、そこにも異なる矢羽の模様が描かれているから、若干、省略描法になっていた。

●三井資長と切斑の矢羽

矢羽のちがいで、だれの矢が中つたのかわかるようになっていた。この点も他の場面で確認しておこう。前二〇紙、二二紙・三井資長（季長姉婿）が鳥飼潟にて蒙古兵を追走する場面がある。簞にある資長の矢羽は切斑である。前を逃げる二人に矢が命中しているが、マントヨロイ（綿甲冑）のおかげで、倒れはせず、致死傷には至っていない。この矢もちろん、二本ともに切斑であつて、資長が射たものである。そこまで気配りして描写した。絵師は合戦のルールどおりに、依頼主の指示に従つて画いた（ただし絵であるから、すべてが真実だったのか否か、まではわからない）。『後三年合戦絵詞』でも矢羽は模様や色によって、描き分けられている。

II章 風を描く（弘安の役・博多湾合戦）

Hints from the way of wind blows: The Battle of Ko-an, in Hakata-wan Bay

3 海上合戦・不利な低位置、逆風での苦闘！

●左画面から推測できる右欠損部——低位置にいた季長の船と切斑の矢



（図8）季長姉婿 三井資長の矢が蒙古兵に中る



(図8-1) 拡大、中った矢は(右)資長の手羽



(図8-2)



(図9-1) 『後三年合戦絵詞』 侍ごとに画分けられた矢羽 本黒、黒羽、中黒、赤羽(染羽)、白羽、大中黒、切斑(蒙古襲来絵詞も同様)



(図9-2) 『後三年合戦絵詞』(東京国立博物館所蔵) 射放たれた矢も識別可能

以上を踏まえて後二八紙を見る。この画面は読者には余りなじみがなかった光景かもしれない。しかし日・麗（蒙）の船相互の海上激戦を画く、唯一のものである。絵詞の中でも秀逸に属する、迫力に満ちた戦闘シーンなのだ。海上を二隻の蒙古船が進んでくる。拔都魯（バートル、またはバツール＝勇敢なる）舟と呼ばれ、軽くて速い船（軽疾舟）とも呼ばれた、蒙古の上陸用小艇が二隻である。

二隻の船の前面側板には、かなりの矢が中つている。読者は描かれた激しい戦いにおどろくが、所詮、板にしか中らなかつた矢は、外れ矢である。日本兵の矢を奥の蒙古船は矢盾で防いでいる。しかし矢盾が配置されていない空間が一ヶ所ある。これは描写の都合上で開けたものではあるが、その位置にいて旗を持つ兵の前面の盾には六本の矢が刺さっている。矢盾に隠れながら立つ旗手の目は、恐怖に怯えたか、空ろである。そこを日本兵が狙った。すぐ後ろにいた蒙古兵に、日本側の矢が命中し、流血の惨事となった。ただし矢羽が描き込まれておらず、羽模様はわからない。

並走する前側の船には、なぜか、矢盾が描かれていない（じつさいには並んでいたはずである）。一番手前にいる兵の喉元に日本側の矢が的中、激しく血が流れ、その血は海面を赤く染めるほどに大量であつた。意識もなく、すでに絶命しているようだ。その矢羽は切斑である。

この船の前面に刺さっている矢には、明瞭に切斑と認められる羽は少なく、奥から三本目が切斑と認められそうだ。多くの矢が射られたが、なかなか命中はさせられず、むなしく前面の舟板に中つていた。すべてが仰角であるから、よほどに低い位置から射たものであろう。画かれた矢は外ればかり、しかし切斑の矢を射た人物は、ほとんど外すこともなく、みごとに敵の兵をしとめた。

隠されたストーリーがそこにある。

●後二八紙・失われた右側を推定する

この画面が注目されなかつた理由は、戦っている日本側の船の絵が残らなかつたか



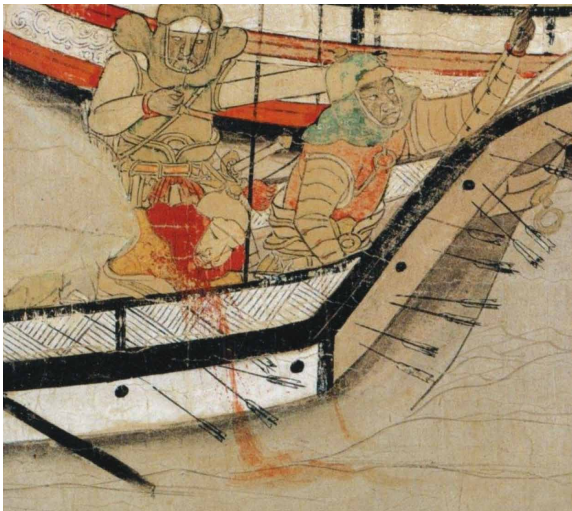
（図10）後二八紙迷子の断簡・いつ、どこ場面

らだ。むろん当初には画かれていたわけだが、長年の間に失われた。奥の船の蒙古兵は矢先を下に向けている。俯角をもつて射撃した。その延長上に日本兵船がいて、蒙古の標的たる日本の武士がいたとわかる。そこにはだれがいたのか。

この絵詞は『竹崎季長絵詞』とも呼ばれるように、蒙古合戦における竹崎季長の勇敢なる行動を画いたものである。登場人物は原則として竹崎季長ないしその手ノ者（家人）・関係者である。季長のほかにも武士団が画かれることはあるが、あくまで季長の行動に関係していたからこそ、画かれたのである（少弐、大友、菊池、白石、河野など）。ならば、ここで蒙古側から矢を向けられた船こそ、竹崎季長の兵船と考えたい。そこに無我夢中で矢を射る竹崎季長、そして手ノ者がいた。

みたとおりに左手前の船、船板に中る矢は、みな仰角で、日本船はきわめて低い位置にいた。ただ敵船側、射撃する蒙古兵は、奥の兵船とは異なつて、矢先を水平よりは上に向けている。弓矢の軌跡は放物線を描くから、標的よりは上を向けて、仰角に矢を放つ。ひとつの理由は標的（日本兵）との距離があつたから、ひとつの理由は盾にて防がれてしまう矢を、盾の高さを越えて敵に中てるためである。よつて季長の船のいた場所は、奥の船の兵の、下を向けた矢の先、俯角の直線上にあつて（俯角ならば直線に近い軌跡になる）、かつ手前の船から蒙古の矢の軌道、放物線の落下点、その直線と曲線の交点となる。季長の兵船は閏七月五日にも登場する。同じ船かどうかはわからないけれど、この段階には当然存在していた。季長の旗印は「三つ目結い吉字」である（文永の役に画かれている、前一八紙）。

低位置にいたから雨・アラレと落下してくる矢は盾によつて防ぐしかない。盾を越えてくる矢もある。片屋根のようにすることもあつたかもしれない。盾に隠れつつ指揮をとる季長は、切斑の矢を、箆に入れていたと考える。危険きわまるなか、確実な弓の技術で、正確に相手を倒すことができたのは季長だった、というストーリーが想定される。むろんこの戦いは矢の応酬に留まり、季長たちは、敵船に上がることなどできなかった（だから、彼の矢が敵兵に中つたと証人になるものもいなかった）。



(図 10 拡大)



(図 10 拡大)

季長着用の鎧は閏七月五日の二つの画面、および日時未詳の河野通有仮屋形（陣所）の絵から、赤糸威の鎧とわかる。季長は蒙古船の手前にて、多くの兵が有効射撃できるよう、直角に船を寄せようとしただろう。しかし鎧を着用しない無防備の水主は、極端な接近を嫌った。

奥側にいる船内の蒙古兵を射た矢羽の模様も、残念ながら画かれていない。切斑の矢が船板に多数、刺さる。それらは外れ矢であつたけれど、一人の敵を倒した。この切斑矢は季長自身ではなく、援護するグループからのものようだ。後述するけれど、そこには有坂義長・岩屋久親・畠山寛阿弥・本田兼房らが乗る島津兵船がいた。よつて旗印は鶴丸に十、おなじみの島津氏の家紋のほずである。この四人は季長の軍功の証人となる人々で、絵師も好意的に描写したと想定できる。

*10 なお後ろ（奥）の船は前面のみに射手がいて、後方の兵は槍や鉾を持つている。分業があつて、彼らは上陸後の戦闘要員だつた。前二七紙、龜原山（祖原山）ないしは別府にて布陣する蒙古勢も、弓を持つものは騎馬の三名で、鉾槍を持つものは、騎馬が一、歩行が一八名ほどで、槍が主体のように見える。

また手前の船は左側に大きな画面の破損がある。破損部の中にわずかに体の一部のみが残された。倒れた兵の左の人物は、手の動きからすると、武器は持つていないようだが、艀の位置からすれば、漕手ではない。さらにその後方に上向きの人差し指で日本側を指す手が画かれている。これも射手ではなく、斥候か将校の腕で、なにか日本側の弱点、または異様な動きを察知したようにみえるが、破損がひどく不明。

漕法に関しては手前の蒙古船の櫓は舳先の方に向いている。和船であれば、櫓は通常、せがい（船柁、舷側）に置かれ、艀（船尾）側に延びる。蒙古船は打櫓、オール漕法で、漕手（水主）は後ろ向きに漕いでいた。奥の船について、漕手は画かれていないが、同様に後ろ向きで、オール漕法で船を漕いでいたとわかる（後ろ向き漕法は絵詞でもここ以外の場面には、ない）。

船には花の文様あるは波状の文様がある。唐草・唐花らしい『中国の文様』一九九一、ISBN:4-09-587003-6。船の先頭、矛先には装飾的な幡があつて、旗印であろう。火焰状の縁取りがあり、いずれも、いかにも大陸的な描写である。季長、そして絵師は、大宰府にいた。戦後になって、兵船はムリでも貿易船たる中国船を目にすることができた（竹崎季長の本貫地は菊池川流域にあつて、日宋貿易に関与していたと推測している。著書参照）。

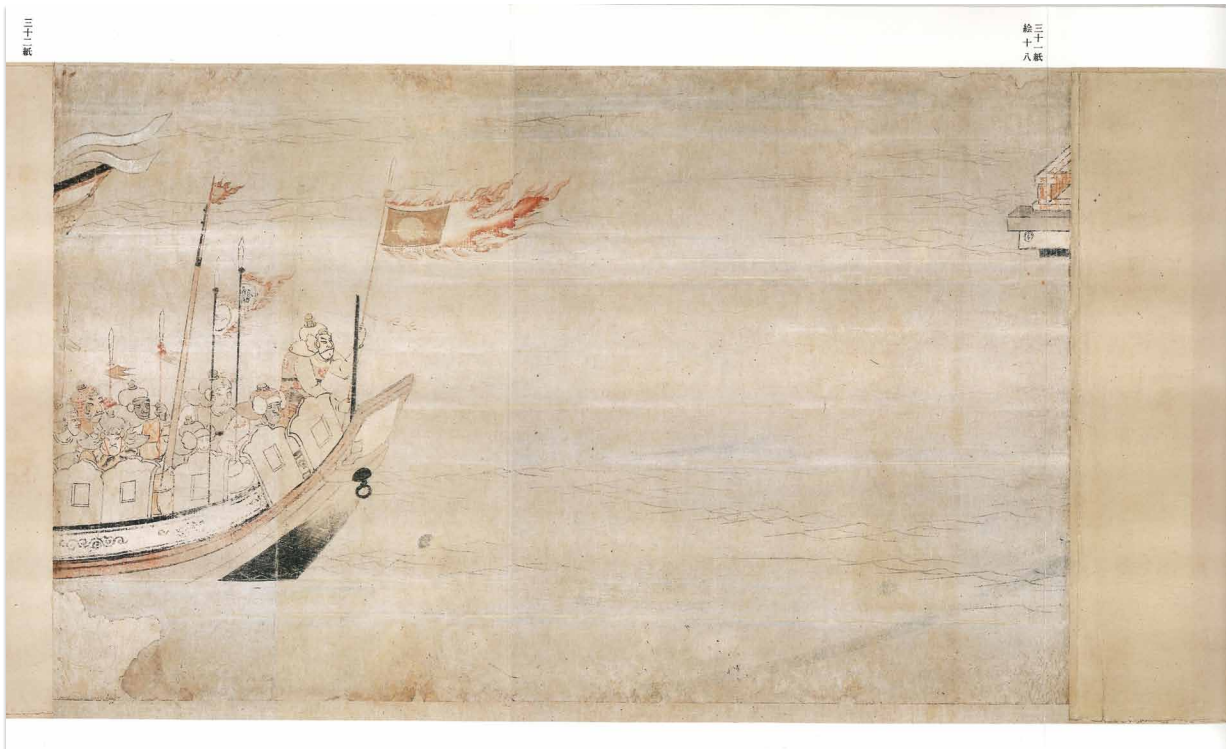
●同じ波

つぎに後三一紙をみる。見てきた二八紙にきわめてタッチが似ている（色調の明暗に若干差がある）。船が二艘、併走している。弓矢をもつ射手は画かれておらず、戦闘前である。矛・長刀を持つて、戦場に急ぐ蒙古兵である。波の感じも二八紙に似る。

右側に台座らしき一部があるが、高麗船（蒙古船）にはみなこうした台座があつて、将校（校尉）が座る。台座は前を行く船の艀（とも、船尾）の一部であつた。

筆者はこの二八紙と三一紙、二つのシーンは同じ日の、同じ時間帯のもので、接続し、連続すると考えている。ただし三二紙の右に一枚（ないし半枚か）の料紙があつて、失われた一枚には台座船の全体が画かれていた。決戦場に進む蒙古船団が並走する。よつて全体は、左に猛追してくる一隻、その右、中央の欠損した料紙に、同じく戦闘前の複数隻、そして右に激戦さ中の二隻、そして失われた料紙に、蒙古船と戦う竹崎季長ならびに島津手ノ者の兵船とつづく、このように左から右に画かれていたと推定する。

現在の絵詞の接続は、寛政九年（一七九七）、熊本細川藩にて修理した際のものである。二八紙と三一紙の間には二枚分の白紙が接合されている。前巻・後巻を通じて、修理に際して二枚もの余白を設けたところは、ほかにはない。細川藩の学者もまた、この二つの画面が一枚分を含んで接続すると考えていたような気がする。



(図11) 風、波

●同じ風

著者が両者（二八紙と三一紙）には一体性がある。二紙を連続する画面だと判断する理由には、もうひとつ、風向きとの共通性がある。三一紙も二八紙も、ともに風は左から右に吹いている。三一紙では奥の船の白い吹き流し、手前の船の鉾・檣に付された小さな旗もみな左から右に吹いている。旗は真横を向いているから、かなり強い風のように感じられる。ただ二八紙では手前の旗は右から左になつていて、奥の船が左から右に靡くことは矛盾しているが、これは手間の旗手が強い力で旗を振ったからであろう。

船の進行によつて、うしろに向かつて旗が靡くことがふつうだろうから、逆方向の風向きなら、よほどに風が強かった。季長はそのことを、そうとうなこだわりをもつて記録に残そうとした。

矢は風上には飛びにくい。風下に向かつては強弓となる。このとき季長兵船は、逆風のために、苦しみぬいた。先に二八紙では日本船が蒙古船よりも低い位置にあつて、そのため日本は蒙古軍に対して劣勢になり、あやうく餌食になるところだったことをみた。風もまた味方をしなかった。敵に対し有利な位置につけようとしても、強風のために操作はままならない。それほどに苦しい中でも、敵兵二人を倒すという戦果を得た。それを書き残した。強調して、し過ぎることはない(図12)。

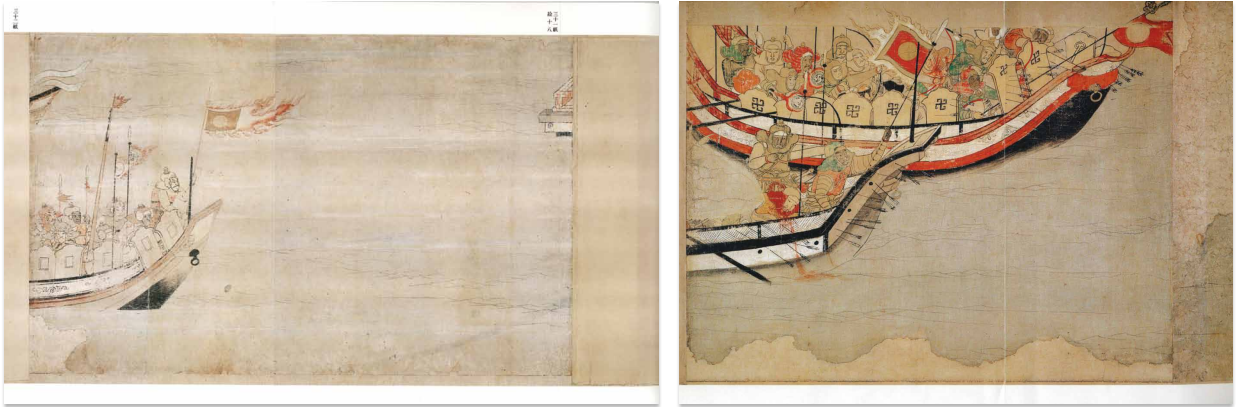
以上の考察を踏まえて、失われた右画面を推定復原した(図12・右)。絵は原案・服部、描画は眞田珠里さんによる(詳細は後述)。

●閏七月五日の風

風を確認するため、別画面を見る。閏七月五日では志賀島に向かう日本兵船の旗は後ろに流れている(一五・一六紙、一八・一九紙、図版割愛 従来は志賀島ではなく、鷹島に向かうと誤認されていた)。ここも左から右に風が吹いていた。そし



(図12-右) 風下、低い位置、劣勢 → 敗戦、志賀島奪還に失敗、右は私案による復原案 (作画は眞田珠里氏)



(図12-左) 風、波。彩色のちがいがあがるが、図柄に共通性がある。あるいは右(28紙)には後世の補色があるか。

て季長が敵船に乗り込んだ段階でも、風は左から右だから、同じ日、一連の場面であれば、風向きは一貫して同じに向きに画かれている(二六・二七紙)。絵師の細心の配慮があった。

*11 図12左の船には赤い帆柱のようなものが画かれているが、帆は掛っていない。帆があれば進むうそでは各段に楽なのだが、進む先も速度も風任せになってしまうから、戦闘に臨む船では帆を使うことはできない。

4 海戦はいつか・どこか

●季長は博多湾・今津湾の外では戦っていない・通説は否定される

さてそれではこの海戦はいつもののだろうか。すでに著書にて明らかにしたが、これまでは「神」風史観が卓越しており、閏七月一日、鷹島にて「神風」のため蒙古軍は殲滅した、とされてきた。そして前提に、蒙古・東路軍は志賀島を攻めきれず、鷹島まで引き上げて、江南軍と合流したとしてきた。この図式にしたがって、一般書(啓蒙書)も教科書も記述されていたし、歴史家も踏襲していた。誤認のままだったといえる。よって博多湾を防御していた日本軍(竹崎季長を含む)は、前半では東路軍(高麗軍)と戦い、後半では西に移動して、東路軍+江南軍(旧南宋・殿前司軍)、全軍と戦ったとされていた。

桜井清香『元寇と季長絵詞』(昭和三二年・徳川美術館発行)も、絵詞での合戦が鷹島であるとの前提で、異国人兜を高麗タイプと南宋タイプに分け、いくつかの場面をその指標によって区別しようとした。じつさいには東路軍(高麗軍)は志賀島におり、江南軍は鷹島にいたから、鷹島にて高麗タイプの兜が使用されることは、ほとんどない。絵詞の兜は鷹島海底から出土する兜にまったく同じであるから、蒙古軍の使用したものに同じである(高麗軍使用の兜については、未詳)。

竹崎季長を初めとする肥後、また筑前・豊後の御家人が博多湾岸から離れるこ

とはなかった。前面に位置する志賀島・能古島に、蒙古軍（東路軍）が在陣し続けていたからである。だからこそ、季長もまた菊池一族も、生の松原にいた。酉の刻の合戦に間に合う距離にいたのである（既述）。

また蒙古は六月長門にも上陸し、また壱岐や対馬にも基地を置いていた。日本側は対馬を放棄した。壱岐には反撃をかけたが、その軍事行動に当たったのは、壱岐に最も近い肥前国御家人で、肥前国守護が率いた。竹崎季長は博多湾・今津湾内にて戦った。近著にて蒙古軍の動きを、

◎東路軍

五月三日合浦発↓その日のうちに対馬到着・五日頃までには全島掌握↓一五日頃に壱岐↓二六日に志賀島（日本世界singa村⇨志賀島）↓六月六日に志賀島増派・交代↓七月二七日頃に志賀島より一部・連絡隊が鷹島（打可島）に移動↓閏七月一日台風↓五日海上合戦

◎江南軍

六月一八日舟山発↓二一日頃済州島↓二五―二九日に宇久島・小値賀島↓七月初め平戸島↓七月一五日頃鷹島着↓二七日頃志賀島より連絡支援小隊が鷹島へ↓閏七月一日台風↓七日海上合戦

と改めたところである。竹崎季長の従軍記である『蒙古襲来絵詞』『竹崎季長絵詞』においては、博多湾以外の合戦を考慮に入れる必要はない。

●博多湾海戦

そこで博多湾にて合戦があった日を列举し、二八紙・三二紙の場面がいつの日のものなのかを絞り込んでいきたい。

(1) 五月二六日志賀島上陸戦

▲『高麗史』『高麗史節要』

五月辛酉（二六日）、蒙古軍が日本世界村大明浦に至った（『高麗史』列伝・金方慶伝、『高麗史節要』）。世界村⇨singaは志賀島で、これまで、通説が世界村を対馬佐賀としてきたのは、誤りである。朝鮮通信使の記録に明らかなように、高麗から対馬に渡るには、日和を見、風向・風力を確認したうえで、必ず一日で到着した。渡海に失敗し、碇泊できなければ漂流になる。よって出発した五月戊戌（三日）の夕刻には到着した。また高麗はふつう対馬を「日本（対馬）」とは表記しなかった。高麗は、対馬は自国領であつて、倭人に占拠されていると認識していた、と推測する。

五月辛酉（二六日）とあるのは『高麗史節要』のみで、『高麗史』金方慶伝には日付を欠くが、このあと六月記事に続くから、この戦闘は五月のうちのこととなる。「（船より）下りて」とあるように、海戦ではなく、陸戦主体であった。通訳（金貯）がいて、日本語で「檄論」したとある。檄は召集または説論のための文書だから、緒戦では説得を試みたのである（檄論、檄文を発して言いよらせること、『日本国語大辞典』）。けれども、じつさいは激戦になって、朗将ら（康彦・康師子等）が何人も戦死した。

▲『壬生官務家日記』（弘安日記抄）

（六月）五日、異国（船力）鎮西飛脚連々到来六原云々

とあった。六月五日・京着の記事は、伝達に要する日時（八日か九日程）を考慮すれば、博多周辺なら五月二六、二七日頃に起きた事件となる。すなわち『高麗史節要』（五月辛酉⇨二六日）の記事に対応する。

以後二ヶ月以上に及んで、蒙古・高麗は志賀島を占拠し、堅固な要塞とするこゝに成功した。

(2) 六月八日志賀島・能古島沖海戦と陸戦

▲「管軍上百戸張成墓碑銘」

「百戸（百人の兵）を率いる校尉張成（とその部隊）は、六月六日に志賀島に至り、夜半（将夜半）に倭（日本）の来襲を受けた。張成は管轄兵と船（百人）によつて戦い、曉に賊は戻つた。八日に賊は陸路から再びやつてきた。張成は纏弓（まき弓）また弩（クロスボウ）をもち、岸に登つて敵を迎え、奪われた地を取り返した。哺、ひぐれ前にまた敵が来たが、追ひ返した。明くる日も兵が来たが、所部の兵を率いて奮戦したので、賊は敗れ去つた。

これは先発隊に引き続いて上陸した校尉張成とその部隊に関わる記事である。六月六日は、夜戦（夜襲）と明記されている。八日・九日に陸戦があつた。八日は昼と夕方である。これを高麗側史料で確認する。

▲『高麗史』世家（岩波文庫上二六〇頁）

六月壬申（八日）金方慶等、日本と戦い、斬首するもの三百余級、翌日復び戦い、（洪）茶丘の軍、敗績す

▲『高麗史』列伝・金方慶伝（岩波文庫下三九頁）

（承前）六月、方慶・（金）周鼎・（朴）球・朴之亮・荊万戸等、日本兵と合戦し、三百余級を斬す。日本兵突進し、官軍は潰え、（洪）茶丘は馬を棄てて走る。王万戸、復た之を横撃し、五十余級を斬す。日本兵、乃ち退き、茶丘は僅かに免る。翌日復び戦いて敗績す。軍中、又大疫あり（以下略）。

正史たる世家における記述中、日付のある戦闘記事は六月壬申（八日）のみである。最大の激戦であつた。列伝の金方慶伝には日付がない。だが、世家が記すその内容も、金方慶伝の記述も、首級の数三百余、翌日、洪茶丘の敗績など、両者は一致する。世家は金方慶伝が記す戦いに同じものであつて、要旨が書かれたもので、ともに六月壬申（八日）と翌日の戦闘である。『高麗史』世家では六日の戦いは割

愛しても、差し支えないものだった。

校尉張成は翌日も蒙古軍が勝利したとしている。ところが、高麗側記述によれば、洪茶丘の軍は八日に引き続き敗績した。洪茶丘は高麗人でありながら、蒙古側の利を優先し、高麗を苦しめた人物で、『高麗史』での評価は低い。『高麗史』がいうように、元将・洪茶丘の軍のみは破れた。全体的には日本が敗れ、蒙古・高麗軍は最強の海岸堡たる志賀島の占領を維持継続した。

つぎに日本側史料を見る。

▲「右田文書」

今年六月八日、蒙古合戦刻、自身并下人被庇由事、申状如此（下略）、

▲『壬生官務家日記抄』（『弘安四年日記抄』・六月条

十六日、鎮西早馬又到来歟、異「」討取三船之由申上云々、襲来「」彼是展転之説也、定不「」

蒙古船三隻を拿捕したという『日記抄』の記事は、博多・京都間のタイムラグ（通信に要する日数）を勘案して逆算すれば、八日前後に起きた事件（博多発）が一六日に京着したもので、六日から八日・九日にかけての一連の志賀島合戦を指している。

こうして整理してみると、史料の記述が最も多いのは六月八日である。疑いなくこの日が最大の激戦であつた。右田文書にあるように、右田氏のみならず、多数の日本側、御家人が負傷した。

『日記抄』をみれば

廿一日、鎮西早馬去夕又到来、異国之「」由申上云々、早「」
廿四日、鎮西早馬到来于六「（原力）」申上云々、實「」

廿七日、異国又襲来、鎮西合戦之由、早馬先「」委可尋記之、

とあつて、その後も合戦は続いている。三日か四日に一度早馬が出た。タイムラグで逆算すれば旧暦六月一二日、一五日、一九日にそれぞれ鎮西にて合戦があつた。「異国又襲来」とある。蒙古側による攻撃で、月齢と潮汐を確認すると、いずれの場合も夜戦であらう。

A 五月末に志賀島上陸、守備隊の抵抗戦

B 六月六〜九日 日本側の総反撃（六月六日、夜半日本来襲、六月八日 張成が陸戦に勝利、夕方にも日本再来襲、高麗軍金方慶ら首級三百をあげる勝利、

元は王万戸らが首級五十をあげる。六月九日 再来襲、蒙古勝利）

C 六月中旬 蒙古側の攻撃があつた。

志賀島合戦について、正史『高麗史』（世家）は、六月壬申（八日）と翌日の戦いのみを記述する。日本史料では日にちの明記があるのは六月八日のみである。正史に記録された八日が最も激戦のあつた日である。

●『絵詞』断簡 二八紙はいつか。

『絵詞』二八紙に描かれた戦いはいつのものか。まず昼の戦いだから夜戦の日は除かれる。すると絞られてくる。

蒙古側の援軍が猛スピードで迫ってくる。蒙古は日本の攻撃に対し、反撃体制を整えつつあつた。はじめに日本による不意を突く攻撃があつた。日本側が攻撃した六月六〜九日のいずれかだが、最大の激戦、八日の可能性が高い。竹崎季長にとって、ぜひとも絵詞に記さねばならない重要な海上合戦だつた。

じつはその詳細を知る手がかりが、絵詞のなかにある。

5 弘安四年六月八日・能古島沖合戦の復原―画面の接合・詞書きの接合

手がかりは詞書三八紙である。いままで詞書の最末尾に置かれていて、帰属不明・接続不明、迷子の扱いとされていた。六月八日合戦の記述と認識されていなかったからだ。以下原文の仮名書きを漢字文に変えて引用する。

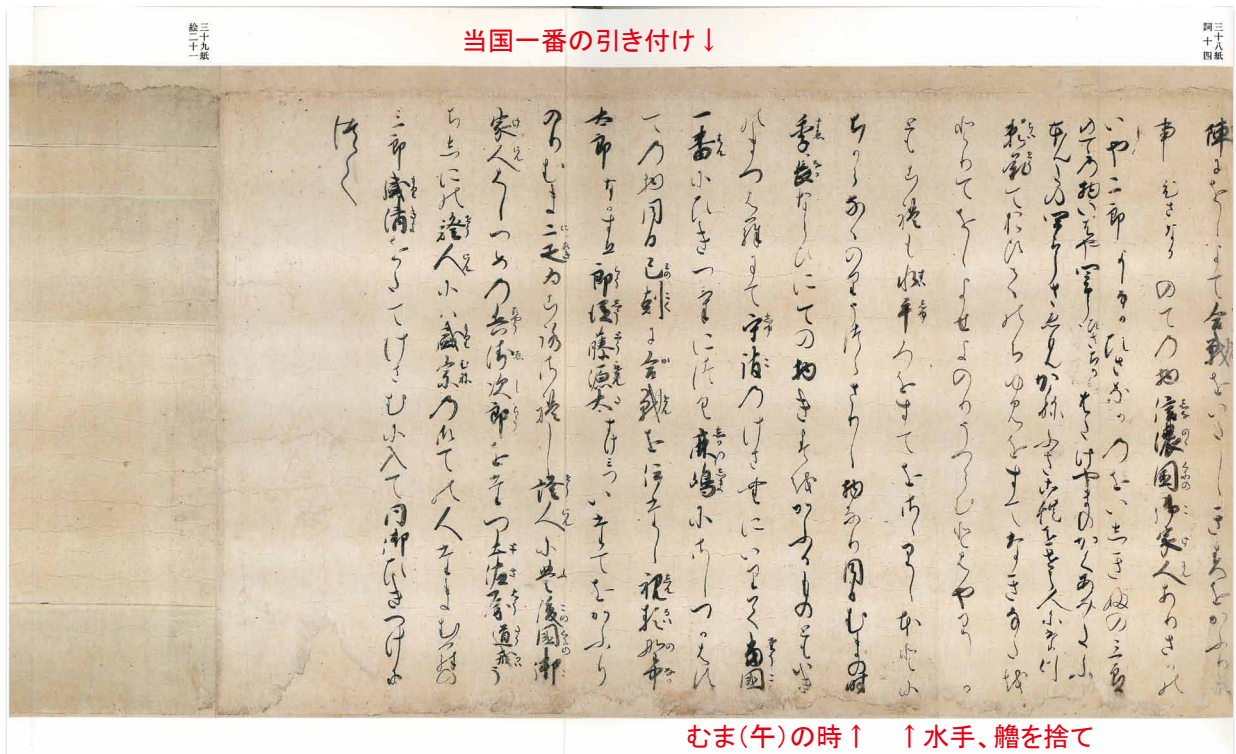
（後三八紙）

□□（敵）陣に押寄つて、合戦を致し、傷を被りし事、（島津）久長の手ノ者〓信濃国御家人有坂弥次郎義長、久長の甥式部三郎手ノ者〓岩屋四郎久親、畠山覚阿弥陀仏、本田四郎左衛門兼房、これを証人に立つ。

（季長家人、小野）頼承、手負いて後、「弓を捨て長刀を取りて押し寄せよ、乗り移らむ」と逸りしかども、これも水手、^{はや}艀を捨て、押さざりし程に、力なく乗り移らざりし者也

同日午の時、季長、並びに手ノ者、傷を被る者ども、生の松原にて、守護の見参に入りて、当国一番の引付に付く。鹿島（志賀島）差し遣わす手ノ者、同日巳の剋（刻）に合戦を致し、親類野中五郎長季、郎従藤源太資光、痛手を被り、乗り馬二疋、為凶徒、殺されし証人に豊後国御家人橋詰の兵衛次郎を立つ。

前段、季長の合戦は、「水手」（〓水主）とあつて、当然に海上合戦である。陣、馬の語感に引かれて、これまでは海上合戦とは思われていなかったのかもしれないが、水手参加が明記されており、海戦である。陣（敵陣）とあるけれど、いくさばのことで、海上を意味したとして差し支えはない。後段は鹿島（しかのしま、志賀島）合戦で、馬が殺されたところから陸戦である。馬は兵船に積まれて、志賀島に行き、陸戦となつて、うち二匹が殺された。この日には水陸の合戦があつた。



(図13) 詞書三八紙午の時、当国一番の引き付け、鹿(志賀)島=巳刻合戦

●巳刻の合戦、午刻の見参

『絵詞』には時刻の記載があった。見参の時間が午、志賀島合戦の時間が巳刻とある。午前の戦いであった。張成墓碑銘に「夜将半」と記された六月六日志賀島合戦については、暁には終わつたとある。よつて該当しない。『絵詞』に書かれた季長自身の合戦と、手ノ者の合戦は、別の時間・別の場所で戦われた。二つの合戦のうち、後段にあつた志賀島陸戦は巳刻合戦、朝の十時前後だった。もうひとつの戦場はより近い能古島沖海戦と推定できる。生の松原に肥後守護代の本営があつて、季長本人を含む本隊が能古島へ、季長手ノ者を含む別働隊が志賀島に行った。能古島から戻つて午の刻、正午前後には生の松原で守護(代)の見参を得た。志賀島隊はまだ帰つてきていない。

志賀島沖までは満潮時に船出して、干潮まで続く流れに乗っていく。この日の潮汐は、同季節の月齢七日、つまり二〇一三年であれば七月一六日なのだが、博多湾は朝八時三九分に干潮だった(計測地は博多港)。すなわち「巳刻合戦」(午前九時から一一時)に整合する。朝九時前に現場に到着して、まもなく合戦したのであろう。張成墓碑に「八日に賊は陸路から再びやってきた」とあるが、兵船は馬を積んでおり、志賀島か海の中道周辺に着岸したのではないか。

よつて巳刻・午刻とあつた絵詞・合戦の日は、この六月八日と決定できる。「当国一番の引付」とあつた。弘安の役における季長の初陣となる。五月二六日に蒙古が占領した志賀島では、日本が陣容を整え、豊後・肥後国御家人らも含めて総反撃するまでに一〇日を要したことになる(おそらく筑前勢を主とする第一陣は二日前の六日に合戦していた)。

六月八日の激戦は、豊後国右田氏が残した右田文書にも記されたし、かれらも負傷した。季長も苦戦し、季長手ノ者が傷を被つた。小野頼承は傷を負つた。弓矢を撃てなくなつたか、または弓では不利な状況と判断したのか、長刀を持って敵船に乗り移ろうとしたが、あまりに危険な状況に、水手が接近を拒み、船を進めなかった。

これこそが先に示した二八紙とその右につづく画面が描く激闘の情景と考える(図12)。失われた二八紙右には、低い位置と、それに加えて逆風に苦戦しつつ、頭上にした矢盾に隠れつつ、適確な射撃で敵を倒す竹崎季長とその手ノ者(家人)たちがいた。長刀を持つとする小野頼承も描かれていたし、櫓を推すことを拒否し、逃げようとし始めた水手たちの姿も描かれていたはずである。隣接する船もいて、島津氏の家人、信濃国有坂・薩摩国岩屋・本田・畠山が乗っついて、丸十・鶴丸の旗があつた。かれらもまた、逆風と低い位置に苦闘していた。

季長本隊のみならず、志賀島への派遣・別動隊も大いに苦戦していた。筑前のほかに豊後・肥後御家人が加わった日本側の一大反撃は、かくして健闘はしたものの、事実上の敗戦になった。上記絵詞・三八紙は敗戦の具体的な様子を描写していたのである。若干の反撃戦が翌日にあつたものの(洪茶丘敗戦)、志賀島は敵の掌中に落ち、城塞化されて、以後閏七月はじめまでの二ヶ月間、蒙古軍の海岸堡、Beach Headとして機能し続けた。

江戸時代に細川藩にて帰属不明とされ、末尾近くに接合された絵、すなわち迷子の扱いだった二八紙・三二紙、そして詞三八紙はもつと前、後巻の巻頭近くに置かれる。閏七月五日と思われる石築地における菊池一族と竹崎季長一行の場面(六紙)よりも、前である。このように提案する。

Ⅲ章 迷子の断簡をもとに戻す —— 『蒙古襲来絵詞』 接続の是正

We returned some pictures to the original place.

●水中の男

かくして巻末に置かれていた迷子の絵は、すべて本来の位置に戻すことができた。いまだ三三・三四・三五紙についての説明が残されているが、その接合についてはすでに著書にて説明したところである。簡単に説明しよう(図13-1-5)。

すなわち、これらは順序が入れ替わる。三三・三四紙は本来、左にあつて、失われた一紙ないし半紙を挟んで、右に三五紙がくる。左には休戦中の蒙古船(高麗船)がいる。大半が鎧も兜も脱ぐ。しかし完全にくつろいでいるわけではなく、ほとんどの兵の表情は険しい。一部は武器も持ったままだ。とくに舵のある側、艫にいる兵は嚴重に警戒を怠らない。そしてその中の一人が右を指さしている。「何かおかしいぞ、いまあそこで何か動かなかつたか」。そういつているようだ。

その先をみると志賀島がある。島には蒙古兵が上陸している。大將はずば抜けての大男だった(実際は枢要人物を巨大に画いたものであろう)。護衛の兵四人が囲んでいる。一人は額に手をかざして周りを警戒する。見張り役だ。志賀島の情景は、海岸近くに鳥居があつた。そこからの通路には矢蔵門らしき重層門、左には先端を鋭く尖らせた柵があり、堀に連続する。変則的な通路もある。容易に近づくことはできない。島の東側、志賀島明神の鳥居のある側は、城塞化されていた。

嚴重に警戒する蒙古兵がいるということは、同時に不審者が近づいていることを予告し暗示する。やはり——島影には二人の男が潜んでいた。一人は水中にいて、もう一人と協力して水深や潮の流れを測っているようだ。これまでの通説(『日本の絵巻』『日本絵巻集成』小松茂美編)は二人を蒙古人としてきた。むろん誤りで、そのことは読者にはおわかりであろう。それでは『竹崎季長物語』(従軍記)としてのストーリーにならない。中山平次郎のいうとおり、かれらは季長の一行である。わたしは水中の男が季長本人ではないかと推定しているが、後日志賀島には季長手ノ者が派遣されるから、手ノ者だけでも知れない(季長本人だと推定した根拠は、右側の男が抹消されていることによる。一人いれば十分だと考えたなら、残されたのは季長ではなからうか)。かれらの行動は、いまや指さす蒙古兵に、察知されそうになっている。

それではこれはいつのできごとか。五月二六日に志賀島が占拠されて、緒戦の激戦があつた。六月八日に最大の激戦があつた。『高麗史』に記述された唯一の日であり、

日本側では軍忠状に記された唯一の日である。この日に季長手ノ者が志賀島で陸戦する。ストーリー性を重視するならば、その間の可能性が最も高い。攻撃の前に偵察は当然に必要であった。すると後巻でも、もともと初めに置かれるべき絵だったのではないだろうか（むろん六月八日以後閏七月一日までのできごとである可能性も完全には排除されないが）。

●河野通有仮屋形

なお現状の後巻の最初の絵は河野通有仮屋形である。これはいつのできごとか。著書にて、閏七月五日の最終決戦で、苦境に陥った季長を友軍の異物投擲作戦が救ったことを述べた。蒙古軍が鼻をつまみ、目も明けられない状態になっている。投擲する日本軍側も異物臭の対処には苦しんだはずである。その友軍が河野通有の水軍だったとするならば、場面は海上合戦が終了した後のもの、弘安の役の最終局面となる。

本絵巻にては、重ね描きが、いくどとなくくり返されている。修正が多かった。この場面に限っては、それが相当地に省略されている。戦場での仮屋形だから、みな土足（つらぬき着用）であり、妻戸も瞬時の行動に支障を来さないように、あらかじめ外してあったが、絵師は妻戸を描き込んでいた。季長は絵師の書き違いだとなぜわざわざ注記を残している。絵師は直さなかった。この場面では詞書がなく、かわりに注記が多くなっている。河野八郎は小具足だった（この点著書に誤記があった。ホームページ、および増刷（三刷）にて正誤訂正。小具足は大鎧を着用する前の段階、略軍装^{わいた}）。脇盾（馬手の草摺）を着用しているが、下に袴が透けて見え、あとからの描き足しとわかる。当初は袴であったが、小具足に描き直している。平装の河野通有と大鎧の季長の間を取って、河野八郎を平装から略軍装に描き換えたようだ。

小具足だから出発前の可能性もある。左には大鎧着用の武士もいる。この場面の順序の決定は、なお課題として残る。しかしこれが最終場面だとすると、この料紙の特殊性も理解できそうだ。

絵巻を見慣れているわれわれは、安達盛宗と竹崎季長が同席した首実検の場面が、クライマックスでありフィナーレであったと信じている。フィナーレのあとには、場面は要らない。絵師もそう考えたのではなからうか。この場面は追加注文であったように思われる。当初の構想にはなかったものか。こうした推定が可能なら、河野通有仮屋形は首実検の後にくる。

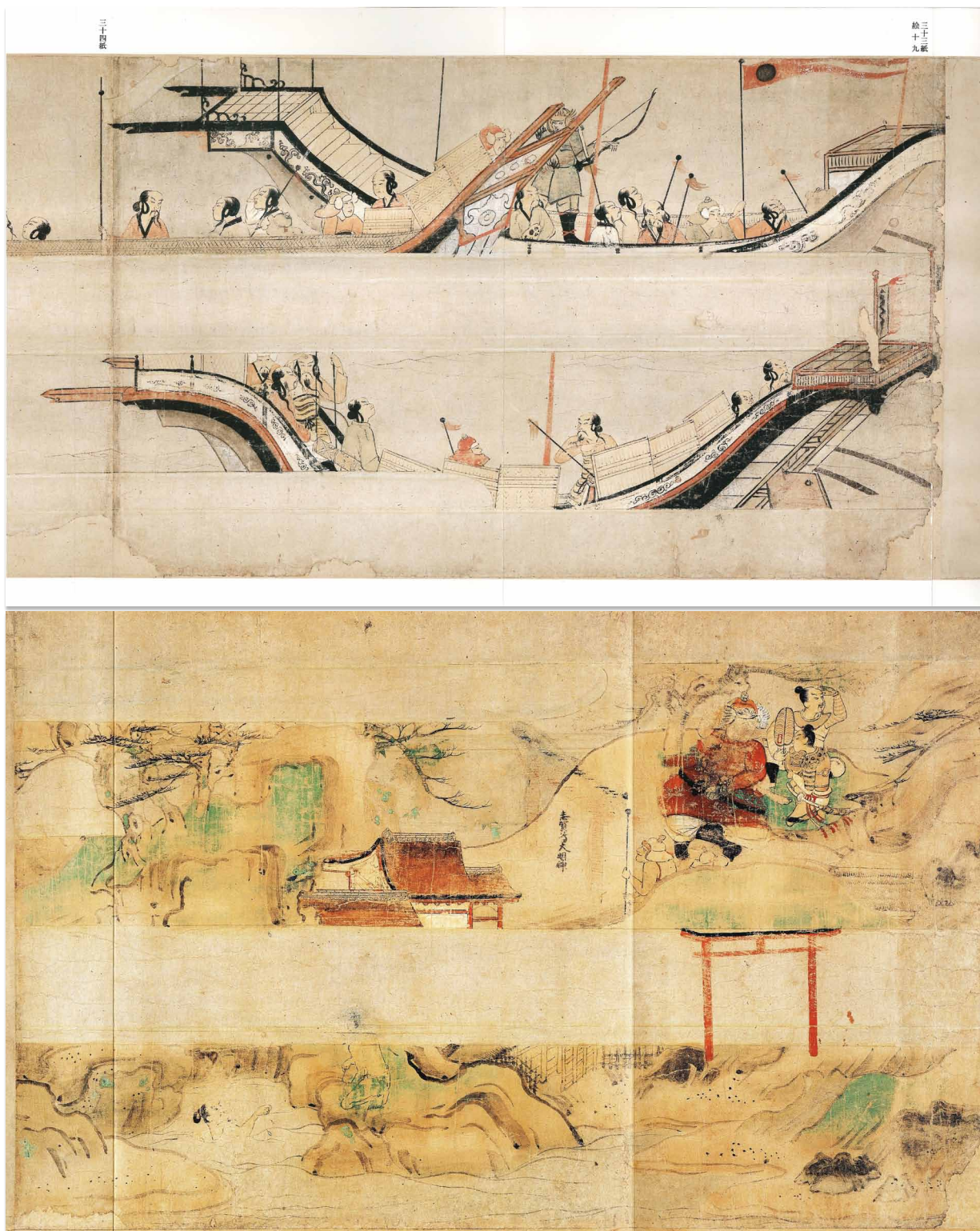
以上の推察によつて、未詳とされていた蒙古襲来絵詞の絵と詞は、河野邸の場面を除いて、みな本来の位置に戻った。失われた部分はあるにはあるが、それはおそらく大量ではなく、絵があつて詞書がないとか、詞書があつて絵がないとか、あるいは三枚連続する画面のうち一枚がないとか、といった程度であろう。現状の絵詞は、かなりの程度まで、全貌を後世に伝えているし、たとえ欠損があつても、『蒙古襲来絵詞』の全容を推定することは可能と考える。

要旨

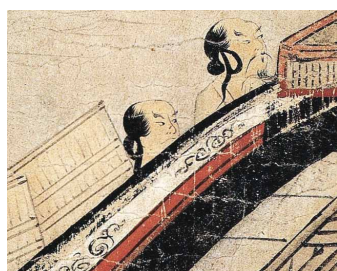
（1）（文永の役・鳥飼浜合戦）

蒙古襲来は、一二七四年（文永の役）と、一二八一年（弘安の役）に元（＝モンゴル、漢字表記が蒙古、皇帝はフビライ）が日本に侵攻した事件である。その様相を画いた絵巻が残されている。『蒙古襲来絵詞』である。その『蒙古襲来絵詞』すなわち『竹崎季長絵詞』は、竹崎季長の勲功録、武勇伝である。下絵作成の段階から、季長と絵師とのあいだには綿密なやりとりがあつて、季長は絵師に対し、詳細かつ丁寧に現場の説明をした。多くの指示を出したし、完成までには相当な修正（描き直し）もなされた。詞書はリアルで具体的であつて、絵師の想像の所産ではなく、実録そのものである。『絵詞』を読む上で、これまでの研究者はあまりに傍観者であつた。季長本人に感情移入し、主観的に読み解いていく。

まずは文永の役における鳥飼干潟、出現した三人の蒙古精鋭と対決する場面を見る。読解の前提となるキーワードは異時同図法である。時間差を持つ複数場面が



(図13-1)間に一枚入って連続、志賀島沖に停泊する軍船(上、33~34紙)、志賀島の情景(下、35紙)



(図 13-2) 陰しい表情



(図 13-3)



(図13-4)あやしい奴ら！指さす先 → 発見されてしまった(季長グループ)



(図 13-5) いた！怪しいやつが二人！なにをしているのか



(図 14) 後二～三紙

一面面となつている。矢筒にまだ多くの矢が入っているにもかかわらず、弓を捨ててしまつて、懸命に逃走する蒙古兵。その中に二人だけ反撃する蒙古兵がいる。ところが手前の男の左眼に矢が刺さる。血しぶきは地面にまで飛散した。蒙古兵はマントのヨロイを着ているが、顔、とくに眼には、覆う防具がない。よつて（日本でも中国でも）顔面・眼は絶好の標的であつたが、動く。そこを的中させる武士は、よほどの名手である。

武士は的中した矢が、だれの射た矢なのかわかるように、個々人の矢羽が異なつてゐた。左眼に刺さる矢羽は本黒（もとぐろ、ヤジリ側が黒、うしろは白）で、その上部にかすり模様が入つて白になる。馬上の季長の矢羽も、本黒で、かすり模様がある。蒙古兵の左眼を射貫いた名手こそは、竹崎季長だつた。

場面は展開する。異時同図法であるが故に、可能な描写である。三人の新たな精悍なる蒙古兵の出現に苦戦する季長は、自身二カ所に敵の矢を受けた。乗る馬にも中つて、血が流れる。いっぽう精悍な蒙古兵二名には至近距離に本黒の矢が通過している。きわめて惜しいところで、季長は相手を倒し損ねた。季長は三人に対し善戦した。けれど、わずか一馬身ほどの至近距離だつたから、絶命は不可避免的な局面だつた。

三井資長の矢羽の模様は、黒・白・黒・白と交互にあつて、本黒と中黒の組み合わせである（「切斑町型」）。彼の前面を逃げる蒙古兵の兜の鍔と、もうひとりの背中、袖のあたり、二ヶ所に、この本黒・中黒の矢が命中している。三井資長は、竹崎季長ほどには強弓の引き手ではなかつたかもしれないが、優れた技量を持つ武士であつたことが、ここからわかる。

（2）（弘安の役・博多湾海戦）

一七九七年に、熊本藩の学者によつて、『蒙古襲来絵詞』が修理され、巻末に貼り継がれた。そのおり、いつ、どここの情景を画いたものなのかわからず、巻末に貼り継がれ



（図 14）後二～三紙

た数枚があつた。いわば迷子となつてしまった絵と詞書である。二八紙（後巻）、海上合戦の図は右側が失われていたため、これまで研究者もほとんど関心を示さなかった。しかし蒙古兵の表情は、気迫と緊張に満ちあふれ、きわめて優れた合戦場面である。失われた右側には、季長兵船がいただろう。蒙古側の標的となりつつも、必死に反撃していたと推定できる。つまりこの絵に画かれた博多湾合戦は、志賀島沖などに碇泊していた蒙古兵船を襲撃しようとした、日本兵船の戦いぶりである。

志賀島は五月二二日に蒙古軍が占領した。『高麗史節要』は「日本世界村」と表記する。世界はSuijaと発音された。六月以降、戦いの経緯を示す日本側の記録には『官務日記抄』（別名『弘安日記抄』）ともいう、朝廷の実務日誌、および『勘仲記』（藤原兼仲日記）がある。そこには戦いの経緯を報告してくる早馬（馬で郵送・通信）・飛脚（走って郵送・通信）が、京に何日に到来したかが記録されている。博多・京都間六五〇キロの伝達日数（およそ七日）から、早馬（手渡し郵便箱）出発の日も逆算して推定できる。内容はその直前にあつた激戦の報告と考えられる。六月上旬には蒙古側の攻撃がくりかえされていた。

元（蒙古）側の記録には、将校であつた張成を顕彰する墓碑文がある。張成の部隊は後続隊として六月六日に志賀島に到着した。日夜激戦があつて、それを悉くはね除け、撃退したと記すけれども、その功績を強調するものだから、誇張もある。武士たちが手柄の承認を求めた古文書（軍忠状）がいくつか残されており、その合戦の日は六月八日となっている。むしろこの激戦は、張成碑文にも記されている。小競り合いはあつたけれど、総力を挙げた日本軍の本格的な反撃は六月八日で、それは翌日まで続いた。

後巻・末尾近くにあつて、迷子の扱いであつた詞書三八紙も、前欠であるためこれまで正しく理解されてこなかった。鹿島（＝志賀島）に派遣された竹崎季長の手ノ者（配下、家来）がいて、かれらは巳ノ時（午前一〇時前後）に合戦した。季長本人は午の時（一二時前後）に、生の松原にて守護に見参を得た（面談して合戦

の報告をした）。そして季長は「当国一番の引付」、つまり肥後国御家人としては、このたびの合戦の一番はじめの手柄であると認められた、と述べている。したがって肥後勢にとつては、これが弘安の役最初の合戦であつたことがわかる。

この合戦のあつた日が何日なのかは記されていない。詞書きが欠損して記録の前半が失われているからだ。しかし、前記の張成碑文が記す志賀島での日本側反撃は、六月六日までは、いずれも夜襲であつた。よつてこの巳ノ時の合戦には合致しない。潮流の流れからいえば、日本側は満潮時に博多湾沿岸を出て、引き潮に乗つて、干潮時に志賀島沖に到着し、合戦の後、満ち潮に乗つて沿岸に戻った。この潮汐に一致する日、すなわち巳ノ時直前に干潮となる日は、旧暦の六月八日（月齢七）であるから、合戦はこの日のものと推測できる。季長自身は志賀島の兵よりも早く、生の松原に戻ってきているから、かれの合戦場は、より近い、能古島沖であると推測できる。

絵二八紙に続いて絵三一紙がある。蒙古船が疾走している。いまだ戦闘態勢に入つてはいないが、緊張に充ち満ちている。この絵はいつの絵か。激しい西風は二八紙に共通する。『蒙古襲来絵詞』は、風向きを忠実に表現していて、一つの場面・シーンでは風向きは同じである（季長敵船乗船図である二六紙、二七紙も西風で統一されている）。風のほか波の描き方にも共通性がある。これらを考慮すれば、二八紙と三一紙は同じ日、同じ時のものと推測できる。二八紙が季長兵船と戦闘中の船であつて、三一紙はそこへ救援に駆けつける船（バートル軽疾舟Ⅱ勇ましく、軽く、速い船、と呼ばれた）と判断できる。その右端に、別の船の艫の台（多く将校・艦長がここで指揮を執る）が描かれているから、二九紙と三一紙の間にはさらに一枚ないし半枚の絵画があつて、一艘以上の船があつた。二艘と対戦しさらに敵船が救援にくる。季長にとつてはピンチだった。

よつて画かれた日時と場面が、弘安四年六月八日で、能古島沖合戦であつたことが分かった。季長兵船を狙う蒙古船からの射撃角度は俯角、および仰角で、俯角の

軌跡は直線になり、仰角の軌跡は放物線となるから、両者が交わる場所に、竹崎季長がいた。また詞書から、小野頼承が手負いとなったことがわかる。絵には負傷した彼も画かれていただろう。だが二八紙・手前には首を射られて瀕死の蒙古兵がいた。その矢羽は切斑である。多くの矢は船の側板に中つて有効な射撃にはならなかった。そうした中で唯一、適確な射撃ができた武者の矢羽は、この矢羽と同じ模様となる。失われた画面・竹崎季長の簾（えびら・矢筒）には、この模様の矢羽が収納されていたと推測した。二八紙・奥にも矢が中つた蒙古兵がいたが、これは並走していた島津兵船からのものである。島津一門、有坂（信濃国）や薩摩国岩屋、畠山、本田を始め、数人が季長ならびに手ノ者の戦功・負傷の証人となった。かれらのうちの、だれかが射た矢であった。

このように善戦はしたけれど、季長兵船は低い位置からの射撃を強いられ、加えて風も逆風で、圧倒的に不利であった。不利な条件と苦戦は、日本軍全体に共通する。かくして総反撃は成功せず、以後弘安四年閏七月五日まで、志賀島・能古島、ともに蒙古軍の強力な海岸堡、陣地として機能し続けたのである。

かくして迷子になっていた絵二八・二九紙、詞書二八紙を弘安四年六月八日能古沖海戦と位置づけることができた。研究史において、なお残る迷子とされていた料紙に、三三紙、三五紙がある。別に発表した『蒙古襲来』（山川出版社・二〇一四年二月）にて、三五紙の左側の人物は、海中より志賀島に潜行した季長一行（本人ないし手ノ者）であり、志賀島を蒙古側に占領されて以降、奪還作戦に先立ち、情報を得ようとしている場面と、および三五紙右上では志賀島にて厳重に警備をする蒙古大将と、その配下が画かれていると推定した。現況では三五紙の右側になっている三三・三四紙は、本来、制作時には一紙ないし半紙を挟んで、三五紙の左側にあつたものであるから、接続の訂正を提案した。志賀島沖にて碇泊中、あやしげな人影を発見した船上の蒙古兵が、そちらを指さしている。あやうく発見されそうなピンチであった。日時までは確定できないけれど、かくしてこれまで

の蒙古襲来絵詞研究において迷子となっていた断簡は、ほとんどを正しい位置に帰すことができた。

The Japanese soldiers fought well But they were in a totally disadvantageous condition. The pictures showed the wind was headwind and Suenaga' s soldiers had to shoot from a low position at the Bottom of the wave. The Japanese side had Been facing disadvantages and uphill Battles in common. Their attack in full force failed and the Mongolian army kept Both Shikano-shima Island and Nokono-shima Island as their impregnaBle Beachhead until leap month July 5th, 1281 (Ko-an 4).

Thus I could figure out where the pictures (numBered 28 and 31) and the explanatory note (numBered 38) Belonged. They were aBout the sea Battle in the offing of Nonono-shima Island on June 8th, 1281. Still we have another two pictures numBered 33 and 35, which we don' t know where to put. They were also considered to Be stray pictures in the history of research of the scrolls. In Moko Shurai (The Mongol Invasion of Japan, Yamakawa Shuppansha Limited, NovemBer, 2014), which I puBlished, I presumed that the picture numBered 35 depicted Suenaga' s party (Suenaga himself or his retainers). They were going deep underwater to land stealthily on Shikano-shima Island. They wanted to take the island Back and had Been trying to get the information of it since it was occupied By the Mongolian army. I also see Mongolian officers and his soldiers who were on heightened alert on Shikano-shima Island in this picture. The picture numBered 33 was put on the right side of the picture numBered 35 at present, But it was supposed to Be on the left side of the picture numBered 35 when painted, proBaBly with one or half-sized successive picture attached Between them. I proposed they should Be put in the right order. The picture numBered 33 depicted the Mongolian soldiers on the ship anchored off Shikano-shima Island. They found a duBious human figure and were pointing at him. Although I could not confirm the time and date of these two pictures, I could put almost all the pictures and notes that had Been like lost children in researching Moko Shurai EkotoBa in the right position.

inscription said the Japanese counterattacks were all made at night until June 6th, all the Battles so far did not agree with this Battle. Considering the flow of the tide, the Japanese soldiers left the Beach of Hakata-wan Bay at full flood, arrived at Shikano-shima Island when the water was low with the eBB tide, and came Back to the Beach at high water after fighting. I checked the day which had the same eBB and flow as aBove and the day when the tide was low right Before 10 o' clock in the morning. It was June 8th in the lunar calendar (moon phase 7). I think the Battle took place on this day. Suenaga returned to the Ikuno-MatsuBara Beach earlier than the soldiers who were sent to Shikano-shima Island. Then I presumed that Suenaga fought the Battle in the offing of Nokono-shima Island, which lies nearer to the Beach than Shikano-shima Island.

The picture numBered 28 was followed By the picture numBered 31. In the picture numBered 31, Mongolian ships were rushing. They were not yet in attack mode, But full of tense atmosphere. When did this picture illustrate? The strong wind in this picture corresponded to the picture numBered 28. "Moko Shurai EkotoBa" faithfully depicted the wind direction. Scenes of the same place showed the same wind direction. (The pictures numBered 26 and 27, in which Suenaga was seen to venture into the enemy' s ship, were painted with the same west wind.) Not only the wind But also the waves corresponded exactly with each other. Considering these facts, I assume that the picture 28 and 31 painted the same day and place. I think the picture numBered 28 was the Mongolian ship fighting against Suenaga' s ship, and the picture numBered 31 was the Mongolian Baatar (Bator) ship (Brave, light, and fast ship) rushing to support. On the right end of the picture numBered 31, I see another ship' s stem (military officers or captains usually take command here). I guess there was more than one ship painted on the right missing part. Suenaga was in critical condition fighting against two ships with another Mongolian ship rushing to support.

As I have mentioned aBove, the picture numBered 31 depicted the sea Battle in the offing of Nokono-shima Island on June 8th, 1281 (Ko-an 4). Some Mongolian soldiers on the ships pointed their arrows directly downward to the Suenaga' s ship and others pointed the arrows upward to make them fly descriBing a paraBola in order to pass over the shields. TAKEZAKI Suenaga was there where the Both arrows crossed. According to the explanatory note, his retainer ONO Raisho got wounded. Raisho must have Been painted somewhere in the picture as well. Besides, there was a dying Mongolian soldier with his neck hit By an arrow in the picture numBered 28. The feathering pattern of this arrow was Kirifu (alternate stripes of Black and white). Most other arrows did not make effective attacks only to hit the side panels of the ships. Kirifu must have Belonged to the most accurate shooter like Suenaga. I assumed that Suenaga equipped himself with Kirifu arrows in his quiver this time though his shooting scene was lost. In the Back of the same picture numBered 28, there was another Mongolian soldier wounded By an arrow. This arrow, however, was shot from the ship of the Shimadzu clan, which was sailing side By side with the Mongolian ship. Four retainers in the Shimadzu clan family, ARISAKA (Shinano Province), IWAYA (Satuma Province), HATAKEYAMA, and HONDA testified aBout who made a military exploit or who was wounded among Suenaga' s retainers. I guess one of these men shot the arrow to the Mongolian soldier from the ship of the Shimadzu clan.

(2) The Battle of Ko-an, in Hakata-wan Bay

A scholar in Higo (Kumamoto) Domain repaired “Moko Shurai EkotoBa” in 1797 and made it into scrolls. On that occasion, there were several pictures and explanatory notes which he could not tell when and where they described. These, so to speak, stray pictures and notes were attached to the end of the scroll. The picture numbered 28 (in the second scroll) was the picture of the sea Battle. Since the right side of this picture was missing, researchers had paid little attention to it. However, the left side was the wonderful Battle scene with the Mongolian soldiers’ expressions full of tension and spirit. I imagined Suenaga’s Battleships were depicted on the missing right. They must have been desperately fighting back though they were being hit hard by the Mongolian soldiers. I think this was the picture of the Battle in Hakata-wan Bay and the missing part must be the picture of the Japanese soldiers who were trying to attack the Mongolian Battleships which had anchored off Shikano-shima Island.

According to Koraishi Setuyo (Digested History of Goryeo), the Mongolian army occupied Nihon Sekai Village (日本世界村) on May 21. Since “sekai 世界” is pronounced as “shiga 志賀” in Korean, I think the village was Nihon Shiga Village, that is, Shikano-shima (志賀島) Island in Hakata-wan Bay. The Japanese record of this Battle since June was written in Kanmu Nikkisho (also called Koan Nikkisho, Daily Record of Imperial Court) and in Kanenaka-ki (The Diary of FUJIWARA Kanenaka). They recorded when the hayauma (mails by horse) or the hikyaku (mails by running) telling about the Battle arrived at Kyoto. As the distance between Hakata and Kyoto was 650 kilometers and it took about 7 days for mails to arrive, we can count backward when the letters were written. They were the report of the fierce Battles that had happened right before the letters were written. Mongolian army had been repeatedly attacking in early June.

As for the Mongolian record of the Battle, there was the inscription on the gravestone of a military officer Chosei. His troops arrived at Shikano-shima Island as a following unit on June 6th. It said they beat back soldiers and won every Battle day and night, but there must have been some exaggeration with the intention of emphasizing their achievements. There were several Japanese documents in which the samurai warriors asked for the authorization of their meritorious deeds and they said the Battle was on June 8th. Chosei’s inscription also had the description of this Battle of June 8th, but the Japanese considered the 8th Battle as the real all-out counterattack though there were many skirmishes between them.

The explanatory note numbered 38, which was not sure where to put and was set near the last part of the second scroll, was hard to understand clearly since the note before it was missing. It said that TAKEZAKI Suenaga’s soldiers were sent to Kashima (Shikano-shima Island) to fight at around ten in the morning. Suenaga himself came back to meet the provincial governor to report the Battle at around noon at the Ikuno-Matsubara Beach. He was recognized as the first retainer that made a great achievement for Higo Province in the Battle. Therefore I think this was the first Battle for the Higo soldiers who participated in the Battle of Ko-an.

The date of this Battle was not written since the former part of the note was missing. As the Chosei’s

(1) The Battle of Bun-ei, at Torikai tideland

Moko Shurai is the Mongol Invasion of Japan of 1272 (the Battle of Bun-ei) and 1281 (the Battle of Kōan) By Kublai Khan of Yuan (Gen=Mongol, 蒙古). Moko Shurai EkotoBa (Illustrated Account of the Mongol Invasion), also called “Takezaki Suenaga EkotoBa,” is a pair of illustrated scrolls commissioned By the samurai TAKEZAKI Suenaga in order to record his Battlefield valor and meritorious deeds. From the early stage of making a rough sketch of them, Suenaga carefully and precisely explained the Battle to the painter and his staff exchanging close and frequent talks with them. Suenaga gave many directions to them and a lot of revising and repainting were made Before completion. The accompanying explanatory notes described the Battle very realistically as well and they gave us the factual information. They were true-to-life record, not out of the painter’s imagination. Researchers in the past have been like onlookers in reading the notes. I would like to read them with a more subjective view, letting myself become emotionally involved with Suenaga.

First, let me look at the scenes at Torikai tideland in the Battle of Bun-ei. Suenaga was fighting against three powerful Mongolian soldiers. They were depicted By the Iji-dozu-ho technique, a compositional method used to show successive events in a unified Background. One Mongolian soldier abandoned his quiver though there were many arrows left in it and ran for his life. The other two soldiers were fighting back. An arrow pierced through the left eye of the soldier depicted in the front. The blood splashed to the ground. They wore a cloak as the armor but no protector for the face, especially for eyes. Both in China and Japan, faces and eyes were the ideal target, but they didn’t stay still. The samurai who hit right in the face was a very good shooter.

The arrows of the samurai warriors were identified By their feathering pattern. Every samurai has his own pattern. The feathering pattern of the arrow which pierced the Mongolian left eye was Motoguro (Black in the tip side) and had Kasuri pattern (scratched or blurred) in the middle and white in the end. This pattern was exactly the same as Suenaga’s. The skillful shooter that pierced the Mongolian left eye was Takezaki Suenaga.

In the next scene, Suenaga was having difficulty fighting against another three strong soldiers. Iji-dozu-ho technique enabled us to see the different scenes at the same time. Suenaga received two arrows in the body. His horse was also wounded and bleeding. On the other hand, his Motoguro arrows passed very close to the two Mongolian soldiers. Suenaga missed defeating them unfortunately, but he had been fighting quite well against the three.

There was another Japanese soldier named MITSUI Sukenaga in this scene. His feathering pattern was the combination of Motoguro and Nakaguro with Black and white in turn. One of his arrows hit the suspended neck guard of a Mongolian soldier’s helmet who was running away before him and his two other arrows hit the back and the sleeve of another Mongolian soldier. Sukenaga may not have been so powerful a shooter as Suenaga, but this scene tells us that he was the samurai with splendid shooting skills as well.